

## 第12回研究発表会の発表要旨

### ヘルマン・ヘッセの「信仰」

宇野将史

ヘッセが „Eigensinn“ と呼び表した「個人」の存在と、音楽に対する彼の考え方をみると、一見したところ両者が表面的には矛盾するようで、実は共通の概念が根底にある。それは「神」である。「わがまま」という挑発的な言葉で「個人主義」を謳歌しているようで、実はその「わがまま」すなわち「自分自身のところ」とは「宇宙万有を支配する神性で普遍的な法則」であり、真の芸術の深奥に彼が見出すのもまた、神の顕現なのである。当然ながらここで「宗教」について考える必要がでてくるが、ヘッセはキリスト教をはじめ、東西を問わずあらゆる宗教の中に価値を認め、そこから共通する重要な概念を引き出した。それは「神秘的合一」である。世俗的な宗教のあり方、すなわち教会という組織やドグマ等の「人間の掟」を通り越して、直接的に「神＝普遍的価値」を知覚する、このような神秘主義的な宗教理解こそが、彼の「個人」そして「芸術」に対する考え方の根幹にある。その意味でヘッセは「宗教」を必要とし「神」を信仰していたが、人間が作り出した掟や集団のあり方には徹底的に反抗した。そして「信仰」こそが、そのまま彼の個人主義と芸術とに対する判断基準のもととなっていたのである。

そしてその判断基準とは「理性」ではなく「感情」や「直感」から発せられるものである。ヘッセの芸術に対する価値判断は「本能」によるものであり、美学や批評といった論理的なスケールから検討をすることはできない。分析や批判、解釈によって芸術を「理解」しようとすることをヘッセは誤りだとしていた。表面的な知識・教養の集積や誇示、現実逃避のための娯楽としてではなく、直感的に芸術作品の奥に「神」、すなわち「人間行動の規範」を「体験」することが芸術を享受する目的であり、そのような規範を喚起することが芸術家の使命であると彼は考えていたのである。そしてそのような「体験」は個人の内部でのみなされるものであり、それを伝達し他者と共有することはできない。そのような「体験」がなされうるか否かは、ひとえに「個人のモラル」となる。

ヘッセは人間の「生」すなわち内的な衝動を積極的に肯定しつつも、あくまで個人は自分の内面に存在する普遍的な法則への合一によって、本来の自己の姿を獲得すると考えていた。自己の内的衝動は、ユングが「昇華」と名づけたプロセスによって「抑圧」され、高次の芸術表現へと転換される。この「抑圧」とは、芸術における必要条件、すなわち個性が神聖な法則に合致することを促すものであり、その意味で、例えば彼が演奏家に求めた禁欲的な姿勢はむしろ「生」の肯定を意味するのである。それは自己の内部への沈潜と内的な衝動の発露との均衡の上に成り立っている。このような「生」のあり方の基本となっているのが、直感的な「神」の認識、すなわち「信仰」である。それは「自己の成長」が促され「人生をより豊かにする」という、ヘッセ文学の至上命題ならびに彼自身の信念に他ならず、少年時代から異常なまでの内的衝動にかられ苦しんだヘッセが、一人の芸術家として生きながらえるための唯一の可能性でもあった。